

二〇二三年度

中等部入学試験問題

国語（60分間）

【注意】

- 1 問題は、一から三までです。
2 解答は、すべて別紙の解答用紙に記入しなさい。

【注意】 受験番号は、算用数字で横書きにすること。

受 験 番 号				

氏 名

一次の文章を読んで、後の問いに答えなさい（なお問題の都合上、本文の表記を一部改めている）。

旅先のホテル。テレビをつけると、「夏井先生の」なんて声が聞こえてくる。どうやら、コロナ禍で「マスクが冬の季語でなくなるか否か」についての話題らしい。

最後には、こう締めくくられた。「夏井先生もマスクは冬の季語でなくなると仰ってます」

うーむ、YouTube「夏井いつき俳句チャンネル」で、コロナ禍によって「冬だけのものじゃなくなってきたね」と語ったかもしれないが、「マスクが冬の季語でなくなった」と断定したつもりはなかったのだが……。

また、今はまだ「花粉症」を季語とする歳時記は少ないが、次代の歳時記に採録される可能性は高い。となれば、「花粉症」の傍題として「春のマスク」も季語となるのではないかと、とも。

そもそも、季語を認定する組織や委員会があるわけではない。季語は、次の手順で生まれる。

- ① a。② b。③ c。④ d。

A 万緑の中や吾子の歯生え初むる 中村草田男

「万緑」は草田男が昭和初期に用いた造語だが、現在ほどの歳時記にも載る主要な季語として定着している。季語が季語として成立するには、長い年月が必要なのだ。

ある時代に起こった禍根によって生まれた季語もある。大正3年（1914年）7月に作られたこんな句。

B コレラ船いつまで沖に繋り居る 高浜虚子

「コレラ船」とは「コレラ」の傍題。船内でコレラ患者が出たため入港を止められた船のこと。

これって既視感あるよね。コロナ禍の初期、患者が出たため港に留め置かれた豪華客船。まさにあの光景が、大正時代にもあったのだ。

さらにこんな句も。

C コレラ怖ぢ蚊帳吊りて喰ふ昼餉かな 杉田久玄

猛烈な下痢と嘔吐で脱水症状を起こすコレラ。致死率が高く、当時は「ころり」と恐れられた。

科学的知識がないと、何をどう恐れたらよいのか分からない。今でこそ、感染症には手洗いとマスク。密にならない。やるべきことが分かっている。が、コレラが怖いと皆で蚊帳の中に入りご飯を食べていた時代の人々を、私たちは笑うことはできない。

今の日本において「コレラ」は絶滅寸前季語として記憶されるが、先月こんな記事を目にした。

「英国防省は10日、ロシアの徹底攻撃を受けて制圧されたウクライナ南東部マリウポリで感染症コレラが大発生する恐れがあると、懸念を示した」。これが世界の現実だと、改めて認識する。

さて、問題の「マスク」に戻ろう。「マスクは冬の季語でなくなるか」。今、結論を出すのは時期尚早と答えるしかない。

季語の生死には、時代の流れの中で、後の人々によって判断されるもの。今を生きる私たちは、淡々と今を詠み続けるしかない。例えば、冬でも春でもないマスクの現状を詠んでいくうちに、季語としての「マスク」の行く末が、自ずと定まってくるのだ。

D 炎天にマスクの上の目が細る 夏井いつき

時代が産み出す季語もあれば、時代と季語が切り結ばれ、季語に新しい意味やイメージが付加されることもある。それを知ったのは、ラジオの俳句番組を通してだった。

ラジオ「夏井いつきの一句一遊」は、7月で22年目に突入した。この春、偶々出題した季語が「春灯（しゅんとう・はるともし）」。春夜、臍にうるんだ灯りの意だが、歳時記には季語の本意（最もふさわしいと考えられる性質や意味）として、「ときに妖艶な趣を醸し出す」とも解説されている。

ところが、番組に寄せられた句のほとんどが、「妖艶」どころか、ウクライナの戦況に心痛め、平和を希求するものばかり。日常の家族の灯りとして表現された句が圧倒的多数を占めていた。

その中でも最も感銘を受けたのが、ラジオ俳号「日土野だんご虫」こと片野瑞木さんの作品。

E 標的にあらず春灯ぞこれは 片野瑞木

標的ではないのだよ、この春の灯りは。家族の集う春の灯りなのだよ。

一読、心が震えた。世界中の人々が、この作品を心に灯してくれる日がくれば、世界は少しだけ歩き出せるのではないかと、と。

俳句というアイテムを手にする私たちは、現状をあるがままに詠み続ける。それら一句一句は Y の証。季語とは、 Y を映す証人なのだ。

（夏井いつきの文章による）

* 傍題…題として主に詠むべきものからはずれて、他のものを詠むこと。

* 昼餉…ひるめし、昼食のこと。

問1

a、b、c、d

に入る文を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

A それを季語とした句が次々に詠まれる

I 次代の編者が自分の歳時記に採録する

ウ それが秀句である

エ 誰かが、ある言葉を季語として俳句を作る

問2

Aの句について、次の問いに答えなさい。

I 季語「万緑」が表す季節を漢字一字で答えなさい。

II この句について説明した次の文章の空らんを埋めなさい。なお、①は十字以内で、③は漢字一字の言葉をそれぞれ自分で考えて答え、②は本文中の言葉を抜き出すこと。句読点等の記号も一字として数える。

「万緑」という季語は（①）様子を浮かび上がらせ、（②）の（③）色と対比になっている。

問3

Bの句の作者「高浜虚子」の作品を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

A 古池や蛙飛びこむ水の音

I 春風や閑志抱きて丘に立つ

ウ 柿食えば鐘が鳴るなり法隆寺

エ 閑かさや岩にしみ入る蟬の声

オ 雀の子そこのけそこのけお馬が通る

問4

線1「私たちは笑うことはできない」とあるが、それはなぜか。次の中から最もふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

A 大正時代に限らず現代の我々も致死率の高い病気に対しては神経質になり、感染を恐れて他者との関わりを避けているから。

I 未知の感染症に対する情報不足から見当外れな対策をとってしまうのは、医学が進歩した現代の我々にも当てはまるから。

ウ 科学的には根拠のない情報だとわかっていながらも、危機的状況にあつては何かにすがりたくなるのが人間の性質だから。

エ 医学が発達した現代人から見ると当時の感染症対策は的外れなものだが、それを馬鹿にすることは人として許されないから。

オ 現代においては未知の感染症に対しても対処法を見いだせるが、いつの時代にも新しい方針に従わない人々が必ず存在するから。

問5 ―線2「今を生きる私たちは、淡々と今を詠み続けるしかない」から読み取れることはどのようなことか。次の中から最もふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

ア 他の人からの評価を気にせず現在を描き出していくことが、俳人としての役目であるということ。

イ 現代の不安定な世情を詠んで世界の人々に訴えていくことが、俳人としての役割であるということ。

ウ 自然が失われた現代において、花鳥風月を詠み続けるということが、俳人としての務めであるということ。

エ 新しい季語を作り出すことによって現在の世相を後世に伝えていくことが、俳人としての使命であるということ。

オ 平凡な生活の中にも俳句の種はあり、それを見つけて作品にしていけることが、俳人としての誇りであるということ。

問6 D、Eの句について次のように説明した。空らんを埋めて文章を完成させなさい。ただし、②、③、④は本文中から言葉を抜き出し、①はふさわしい言葉を自分で考えて答えなさい。なお解答方法については、それぞれ（ ）内の指示に従うこと。句読点等の記号も一字として数える。

Dの句では本来冬の季語である「マスク」が夏の句の中で使われている。これはマスクが（ ① 十字以上十五字以内 ）ようになったためである。

Eの句では「春灯」という季語が、従来とは異なり（ ② 二字 ）を連想させるものとなっている。これは多くの人が（ ③ 十二字・はじめとおわりの三字を答える ）ているという、現在の世相を反映したものである。このように、季語には世の中の変化に応じて、（ ④ 十六字・はじめとおわりの三字を答える ）のだ。

問7 X、Yに入る言葉を本文中からそれぞれ二字で抜き出さない。ただし二カ所あるYには同じ言葉が入る。

問8 本文の内容の説明として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア・社会情勢が厳しくなっている現在、伝えたい思いを季語に乗せて俳句を作り、多くの人々がよりよい社会を生み出そうと苦勞していることがわかる。

イ 筆者は現状があるがままに詠み続けることしかできないと言いつつも、俳句を通して作品の受け手の現実に一定の効果をおよぼすことを期待している。

ウ 「俳句というアイテム」という言い方には、俳句が現実を映す鏡にしか過ぎず言葉を使って変えていくことは難しいという、筆者のあきらめが表れている。

エ 俳句は「季語の生き死に」を通して移りゆく社会状況を詠むことによって、受け手に辛い現実を認識させ、かつなくさめる役割を果たしてくれるものである。

オ 筆者の言葉がメディアで引用され俳句の影響力が大きくなるにつれて、多くの人が俳句を作るようになったため、一つ一つの作品を評価する意義が薄れつつある。

二次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。ただし解答の字数については、句読点等の記号も一字として数える（なお問題の都合上、本文の表記を一部改めている）。

人間と動物の大きな違いのひとつに、「概念」をもっているか否かということがある。我々がよく口にする「正義」とか「平和」とか「国家」、そして「日本人」ということまで、すべては「概念」なのだが、動物にはこのような発想自体がない。動物にとっては目の前にある「現象」がすべてだ。

犬を例に説明しよう。私が昔飼っていた犬がいて、名前は「コロ」といった。だから、私が「コロ」と呼ぶと、しっぽを振って走ってくるんだけど、友人が「コロ」と声を掛けても近寄らないで吠える。呼び方が悪いのかと、「コロ」「コロ」などと変えてみたが、まったく寄ってこない。友人は「なんで？」と首をひねっていたが、これは当たり前である。

犬には「自分の名前」となどという「概念」はそもそも存在しないからだ。飼い主である私の口からいつもと同じ発音、いつもと同じイントネーションで「音」が発せられたという「サイン」を認識して、しっぽを振って私にかけ寄ってきていただけの話である。だから、赤の他人である友人の口から「聞いたことがない音」が発せられても、いつものサインではないと認識して、しっぽは振らないし寄ってもこない。

このように、犬は音や匂いという、人間にはわからないような微細なサインを認識する能力に長けている。そして、そのサインに基づいて行動をする。そのような意味では、きわめて合理的で賢い生き物なのだ。

しかし我々人間には、犬のこのような合理的行動が理解できない。私が「コロ」と呼ぶと反応するので、ほかの誰が「コロ」と呼んでも同じように反応するものと勝手に思い込んでいる。「コロ、コロ」としつこく呼んで寄ってこない、「バカな犬だなあ」なんて苦笑したりする。

犬の賢い行動を理解できないという点では、人間のほうが「バカ」だって言えるかもしれないよね。

人間には「名前」という「概念」があつて、その同一性は絶対的なものと信じている。そして、犬も当然、同じように自分の名前を認識しているはずだと一方的に思い込んでいる。この状態こそが、本書で言うところの「バカ」である。つまり、すごく単純な言い方をすると、「バカ」というのは、「異なる現象を同じだと思い込めるのは人間だけ」ということがわからない人のことである。

実はこの「違うものと同じだと見なす」というのは、地球上の生物を見渡しても、人間だけがもっているきわめて特殊な能力なのだ。繰り返しになるが、動物には「概念」なんてものはなく、音やフェロモンといったサインで世界を認識しているので、違うものは「違う」というようにシンプルに判断をする。

しかし、人間は「概念」をもつ唯一の生物ということで、このあたりの判断がきわめてアバウトというか、いい加減である。つまり、その判断は実際にはいい加減であやふやなものなのに、それが正しくて確かなことだと錯覚してしまう。実はこれが「バカの災厄」、ひいては人間の世界に悲劇をもたらす原因になっている。

実際に、人間同士の対立の多くは、「概念」というものの「いい加減さ」が引き起こしている側面もある。

たとえば、ロシアのプーチン大統領とEUの首脳たち、我々日本人のトップとの間で「国家とは何か」というテーマで話し合う場が設けられたと仮定しよう。果たしてこの議論に答えは出るかというと、どれだけ時間をかけても難しいだろう。

プーチン大統領には自分の考えている「国家」という同一性があり、一方、EUにはEUの「国家」があり、日本には日本の「国家」がある。そんな状況でいくら国家論を戦わせても不毛なだけである。そんなことができていたら、ウクライナ侵攻も起きていないはずだ。

なぜ議論が平行線になってしまふのか。「国家」という概念が「これが国家です」というふうには、単純に指でさし示すことができないからである。「犬」や「猫」のように指でさし示すことができるものは、どれが「犬」でどれが「猫」かというのは単純明快な話だ。犬を指さして「猫だ」と言い張っている人がいれば、「あなたの捉え方は間違っている、あれを世間では犬と呼んでいるんだよ」と訂正してやればいいだけの話だ。

しかし、「国家」や「平和」という概念ではそれができない。十人十色ではないが、個人が考える「国家」や「平和」のあり方というものはそれぞれ異なる。非常にあやふやで、それぞれが「いい加減」に決めて認識している部分がある

ので、「どちらが正しい、どちらが間違っている」という言い争いをしたところで、いつまで経っても答えなど出ないのである。

(中略)

ただ、このように「違うものと同じだと見なす」という性質は人間にとって必ずしも悪いことではない。この、生物としては非常に特殊な能力があったおかげで、人は進化して文明社会を築くことができたという側面もあるからだ。

たとえば、人は「神」という存在や現象をその目で見たことがないのに、「神」を信じる。これは、教義や礼拝を通じて「神」という概念を捏造して、それが絶対的なものだと思いつくことができる能力が、人間に備わっているためだ。仮に、一人ひとりが自分の頭のなかで勝手に「神」を思い描いて、それぞれが「俺にとっての神はこうだ」「私の信じる神様はこんな感じだ」と言い出したとしたらやがて收拾がつかなくなり、宗教としては成立しなくなる。キリスト教やイスラム教などが世界的に広まったのは、それぞれの個人の脳のなかの「神」がみな同一なのだとみなが信じるという、人間の不思議な能力がもたらした結果だろう。

しかし、物事にはなんでも良い面と悪い面がある。「違うものと同じだと見なす」という特殊能力は、人類に進化をもたらす一方で、先ほど紹介したような不毛な対立まで生むこととなる。対立どころか、時に社会に大きな混乱を招いて、罪のない人々を迫害し命を奪うような戦争に発展することさえある。

それこそが、本書の主題である「バカの災厄」だ。

「概念が孕む同一性はひとつ」と思い込む「バカ」というのは、自分の同一性から少しでも逸脱した同一性は認めることができないので、「お前たちは間違っている」と敵と認識した相手を厳しく批判する。その攻撃性がさらに強くなり抑えが効かなくなると、異なる同一性をもつ人間が存在している事実さえ我慢できなくなって、その存在を否定する。つまり、排斥や虐殺といった狂気の行動へと走ってしまうのである。

(池田清彦『バカの災厄』による)

* フェロモン：動物の体内から放出され、他の個体に影響を与える物質の呼び名。

* 災厄：わざわい。災難。

* EU：一九九三年に成立した欧州連合。

* 不毛：成果の実らないこと。無駄なこと。

* 捏造：事実でないことを事実のようにこしらえること。

* 孕む：中に含んで持つこと。

* 逸脱：本筋からそれること。決められた枠からずれること。

* 排斥：おしのけしりぞけること。

* 虐殺：むごたらしい手段で殺すこと。

問1——線1「人間のほうが『バカ』だって言えるかもしれない」とあるが、「人間」の方が「バカ」であるのはなぜか。解答用紙で指定された字数で言葉を入れて、理由を二つ答えなさい。なお、**A**には「違い」という言葉、

Bには「同様に」という言葉を必ず用いること。

問2——線2「バカの災厄」はなぜ引き起こされるのか。解答用紙で指定された字数で言葉を入れて、説明文を完成させなさい。なお、**A**は本文中から抜き出し、**B**には「それぞれ」という言葉、**C**には「絶対的」「ずれ」という二つの言葉を必ず用いること。

三 次の問いに答えなさい。

問1 ①・②の文中にある□にそれぞれ適切な漢字一字を入れなさい。なお()内は慣用句の意味である。

① 昔はにぎわっていたあの店も、町から若者がいなくなったことで□前の灯火(いまにも滅びてしまいそう)だ。

② 手□にかけた(自ら世話して大切に育てた)庭の植物が、次の住人にも大切に扱われているのを見て安心した。

問2 ①～⑧の文中にある——線のカタカナを漢字に、漢字をひらがなに直しなさい。ただし、送りがなが含まれるものは送りがなをひらがなで答えること。

① 有名な政治家がうかつな発言で熱心なシジ者を失った。

② 夕方にはいつも川にソツテつくられた歩道を歩くことにしている。

③ 島の観光地化はコユウの生態系を破壊する可能性がある。

④ どれだけシヨメイを集めても結局事態を動かすことはできなかった。

⑤ 将来は故郷の海をノゾム家で暮らすのが夢だ。

⑥ 旅好きの祖父はシャソウからの眺めを何よりも楽しみにしている。

⑦ 委員会のメンバーを刷新したら面白い意見が出るようになった。

⑧ 定石どおりに進めておけばいいというのはあまりに安易な考えだ。

(以下 余白)